

福井県医師会

だより

第566号 平成20年(2008)8月



「りんごとくるみのある静物」 福井市 加藤 初夫

表紙写真説明：「りんごとくるみのある静物」

骨董市で買い求めた陶器などを並べて描いた。使い古したものに味わいがある。これからも物の質感を追求して描き続けたい。

福井市 加藤 初夫

医 縫 録

医療保険と介護保険

総務・保険担当理事 加 藤 初 夫



「医縫録」の寄稿にあたり、診療報酬改定の現状分析も語りつくされ、なにをテーマにすればいいのか案していますが、介護支援専門員協議会の代表をしながら医療保険と介護保険の両方を見つめてきて、この二つの保険の係わり合いが常に頭の中にありました。表題は大げさですが、もとより論理的思考は持ち合わせない感覚型人間がやぶにらみにより筆を走らせたものです。どうかさっぴいてお読みいただければ幸いです。

平成12年に始まった介護保険は、日本独自の形ということで厚労省にとってはオリジナリティに溢れるものであったようで、当時の役人のコメントには相当の自画自讃がありました。同時に実験的な意味合いも多分にあり、その後2回の改定も厚労省の思うままに実験を試みているという印象が免れません。改定の度に介護事業者や従事者は針のむしろにすわる心地でしたが、なぜか介護事業の団体からは反対の動きは見られず、介護用ベッドや車イスが巷に溢れようと、介護従事者の給料が最低賃金を下回るような事態になってもじっと我慢の子でありました。介護保険の成功は介護事業者や従事者の忍耐に支えられているといっても過言ではないでしょう。その頃私自身ケアマネジャーの全国組織の理事をしていましたが、会議には厚労省の役人がオプザーバーとして出席していました。穏やかで影のようではありましたが、ケアマネジャーという飼い犬に手を噛まれないよう手配をしていたと思われなくもありませんでした。対ケアマネジャーに限らずすべての介護事業者に対して同様な手法があったと思われます。介護保険を医療保険の二の舞にしないという厚労省の強い姿勢を垣間見た気がしました。

一方医療保険は介護保険とは比較にならないほど歴史があり、その歴史は日本医師会と厚生省との闘争そのものでありました。昭和40年代までは医師会側の一人勝ちで、武見会長の保険医総辞退まで及び、厚生省を震え上がらせました。時の首相自ら采配に当たり、それだけ日本医師会の力が絶大で、厚生省側の無力感は相当なものであったでしょう。昭和50年代になると日本医師会の力にも陰りが見えてきて、中曽根行革で初めて診療報酬が引き下げられ、次第に厚生省側にイニシアティブは移りつつありました。それでも正面突破では日本医師会の厚い壁は突き崩せず、厚生省が目指す医療体制そのものの変革は至難の業であったわけです。平成に入り介護保険構想が俎上に乗り始めましたが、厚労省はこの機会を逃しませんでした。介護保険策定と平行して医療保険の変革も目論んだはずで、介護保険で実現したことを医療保険にも仕向けるという手段に出たわけです。例えば療養病床の入院料と食事療養費の自費徴収方式を、介護保険ではホテルコストと食事費として自費扱いにしていることを論法に持ち出し、日本医師会側の抵抗もほとんどないまま決めてしまいました。そして決定的な場面が平成17年12月に突然訪れました。全国新聞の一面に「介護療養病床2012年全廃－厚労省方針」という文字が躍ったのです。療養病床は市中の病院の殆どが所有しており、その療養病床を大幅に削減するという大技は厚労省の日本医師会への最大の挑戦でありました。事前に日本医師会に打診があったのか知る術はありませんが、厚労省が一方的に誘導した事は間違いありません。介護療養病床という形がなかったならば、すなわち医療療養病床のままであったならばこう簡単にはいかなかった

たでしょう。療養病床の再編は現在進行中ですが、巧妙に医療保険に介護保険を絡めた厚労省の一本勝ちであったと云わざるを得ません。

現在の日本医師会と厚労省の力関係は誰の目にも明らかであります。過去に族議員であった政治家もすっかり豹変して、新聞も医師がかわいそう調になっています。ある元厚生省事務次官がこんな事を言っています。「医師にはきちんと患者を診察してもらわなければならない。そのためには物心両面のプライドを絶対失くさせてはいけない。恒産なくして恒心なしである」と。体制側からこういう言葉が出るほど医師いじめは究極に達しています。日本医師会は本来、厚生省が官を主体とした医療体制を築こうとしたのに対して、民である医師を主体にした医療体制を目指して、日本で唯一無二の民間団体として政府に挑戦してきたはずです。残念ながら現在の姿はそれとは程遠く、東だ西だと内部争いをしているのでは、末端の会員は迷い途方にくれるばかりです。厚労省は今回の診療報酬改定、さらに

は2年後の改定をめぐりに小泉改革〈医師会潰し〉の総仕上げをしようとしていると思われま。その目玉はいわゆる診療のマンツーマン方式であります。この人頭制というものがさらに鮮明なものになってしまうと、医療界は砂漠のような潤いのない殺風景な景色になってしまうことでしょう。

数年間ケアマネジャーの理事として厚労省の役人と、ある時はイタリアンレストランでワイン片手に接してきました。彼らの言葉の端々から、介護保険を盾に医療体制の变革を画策しているのを目の当たりにし、巧妙、緻密に仕組まれた術策に舌を巻きました。役人の一念に立ち向かうには、医師会は一丸となって本来あるべき医療を主張し続けるしかないと思います。日本医師会主導の総合医構想を推し進めなくてはなりません。我々は今次、人頭制阻止に向かって総力を振り絞って厚労省に反転勝負を挑むときではないでしょうか。

